

小泉首相の靖国神社参拝に抗議する

2006年8月15日 日本平和委員会

小泉首相は本日、8月15日の終戦記念日に国内外の強い反対の声を無視して、靖国神社への参拝を強行した。

いうまでもなく8月15日は、アジア・太平洋諸国民2000万人以上、日本国民310万人の命を奪った、日本軍国主義の侵略戦争が敗北した日である。それは、日本国民にとっても、アジア・太平洋諸国民にとっても、二度と再びあのような侵略戦争を許してはならないとの誓いを新たにしている日である。

この日の侵略戦争を美化する靖国神社への首相参拝は、とりわけ侵略戦争の被害を受けた人々の心を泥靴で踏みしめるものである。アジアと世界の人々が激しい怒りを表明しているのは当然である。もう退任するのだから、どんな批判を受けてもかまわないというこの行動は、日本の外交を決定的な孤立へと導く、無責任きわまる暴挙である。

靖国神社は、日本によるアジア諸国への侵略戦争を、“正義の戦争”“アジア解放のための戦争”などと美化し、それを宣伝する役割をはたしている特異な神社である。この神社に総理大臣が参拝するということは、その考えに政府がお墨付きを与えることであり、絶対に許されないことである。これは、二度と侵略戦争をしないという反省のもとに国際社会に復帰した戦後日本の出発点を否定するものであり、日本国憲法の平和原則の原点を否定するものである。この靖国神社参拝に、かつての侵略戦争で甚大な被害を受けたアジア・世界諸国民とその政府が、激しい憤りを示すのは当然である。

ところが小泉首相は、アジアと世界の人々が心魂を傾けてその怒りの理由を説明してきたにも関わらず、「理解できない。これは心の問題。他国にとやかく言われる筋合いはない」などと、誠意を持ってこれに向き合おうとせず、平然と参拝をくりかえしてきた。今回もまた、「中国、韓国が不愉快だからということでやめるのはおかしい」などと開き直っている。いったい首相は、なぜこれら諸国民が「不愉快」に思うのかを真剣に考えたことがあるのか。肉親を殺されて、その殺人を「正義」だとする神社に加害国の首相が参拝することを「不愉快」と感じるのは当然だとは思わないのか。こうした小泉首相の態度は、甚大な被害を受けたアジア諸国民の「心」をまったく無視する許しがたい態度である。

われわれは、アジアと世界の人々共に、日本国民の良心をかけて小泉首相の靖国参拝強行に断固として抗議する。次期首相はじめ、日本の閣僚は今後とも靖国神社を参拝するな。